

キャンパス サイン計画

名古屋造形芸術短期大学における

平岩俊郎

加藤松雄

品川 誠

高北幸保



● 第19回 SDA 賞入選

屋内ドアサイン



屋内ドアサイン



屋内ドアサイン



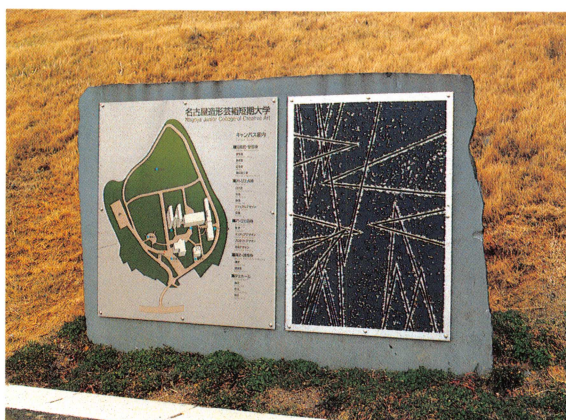
屋内カウンターサイン／ドアサイン



棟標示サイン



屋外誘導サイン／総合案内サイン



総合計画

平岩 俊郎

●はじめに

名古屋造形芸術短期大学は昭和60年 4月を期し、名古屋市中村区稲葉地町のキャンパスを離れ、名古屋市近郊、小牧市の新キャンパスに移転した。これを機会に、同キャンパスのサイン計画を共同研究という形で、4名の学内スタッフによって、その計画から設置完了までを担当した。スタッフと、その担当した研究分野は次の通りである。

平岩俊郎	総合計画
加藤松雄	環境要素
品川 誠	素材・構造要素
高北幸保	視覚要素

●基本コンセプト＝環境と一体化し、接する人の主体性を尊重したサイン

教育の場としての新しいキャンパス、施設との環境的調和づくりをサイン・コミュニケーションの面から考察する——これが本計画スタートの要点であった。

本来は環境イメージの大枠となる建築計画そのもののの中にサイン計画は包含され、計画されるべきものであろうが、各種の事情、条件から別々の形で進めざるを得ない結果となった。したがって、その条件下に立ってのサイン計画であり、厳しい既成の制約のもとに考慮しなければならない諸問題があったことは否めない事実であった。

そこで、当サイン計画は考え方として、環境を形成する諸施設にサインを同化、一体化させることを最初の基本方針としてスタートした。

コミュニケーション・メディアとしてのサインは、その指示機能に

よって人々の行動、あるいは判断を左右させ得る機能を持つ。しかし一方、特別な緊急事態でもない限り人々の主体性は尊重されなければならない。あくまでも環境が人々を規制したり、拘束するものでなく、人々の能動的な意志によって自由に環境が活かされて行くべきものであろう。

また、コミュニケーション機能の基本には、キャンパス内の人、施設、道路、樹木、その他すべてのものがメディアであり、これらとの対話を充分大切に行きたい。なかでも人と人との触れ合いといった温かいコミュニケーションこそ、もっとも大切にしなければならない心であるとの考え方があった。サインが完全であればある程、整備されればされる程、人と人との触れ合い、話し合いは少なくなる。整備されたサインにより、容易に目的に到達でき、目的を果すことができる便利さ、勿論、現代生活においてこの必然性はわかるとしても、目的に対し「尋ねる」、「案内する」といった人間味ある素朴な行為からは程遠い淋しさ、冷たさを感じざるを得ないであろう。教育の場という環境下でのサインとして、例えば見知らぬ土地で他人に道を尋ねる、あるいは盲人の手をとって横断歩道を渡らせてあげる、といった人と人との触れ合いを尊重し、温かく人間味ある素朴なコミュニケーションを期待する願いがあったのである。

以上のことから、完備した便利さを避け、サインの種類、及び数を必要最小限にとどめ、ある程度の余韻を残すべく計画を進めることにし、学内外の人々を対象に配慮すべき要件をチェックした。結果は次のようである。

学内の人々に対し（内向きサインとして）

- 目立ち過ぎない。
- 邪魔にならない。
- しかし必要な場合にはすぐわかる。

学外の人々に対し（外向きサインとして）

- 親切である。
- 押しつけがましくない。
- しかも適切な誘導ができる。

さて、基本コンセプトを踏まえ、さきの配慮すべき要件を満たし、以後展開されるサイン計画の具体的な柱を次の3点にまとめ、計画推進の拠りどころとしてスタートしたのである。

- 1、押しつけがましくないサイン。
- 2、邪魔にならないサイン。
- 3、しかし知りたければすぐに見られて、役立つサイン。

●大学キャンパスにおけるサイン標示の特性

- 1、このサインの利用者のうち、大部分は2年単位で重なりつつ変わって行く学生であり、利用者としては固定化、安定化している。したがって、一度知ればその経験の繰り返しによる習慣性をもっている。そのため、サインの識別は習慣的にカバーされ、サインによる実際の誘導、案内、指示の必要性はかなり少ないと考えられる。
- 2、一方、地域に密接に結びつき、広く開かれた大学として今後の存在意義を考えると、当然限られた人々とはいえ、地域関係者、教育研究関係者、受験生及びその関係者等、不特定外来者のキャンパスへの立入りが予測される。この場合には学内関係者、在学生とは異なってサインによるコミュニケーション機能に依存する度合いがかなり高く、当然、適確な誘導、案内、指示といった機能が要求される。
- 3、キャンパスには、学生個人が学生生活居住区としている各コースアトリエ、講義棟における講義室、アトリエ棟における各工房等、学生が共同使用する諸施設、教員の教育、研究の場であるとともに教員の生活区ともなる各研究室、また、教職員及び学生が学校生活の中で常にかかわり合う庶務、教務、学生の各事務室、その他医務、学生相談、就職指導の各室等、さらに学長室、応接室、会議室を加え、各種の施設、設備が混在する。これら多種、多岐にわたるサイン・コミュニケーションは、一体となって総合的に機能するものでなくてはならない。つまり、それぞれの要件を満たしつつ、あくま

でも全体としての調和、統一を損わないデザインへの配慮が望まれるわけである。

4. 今後、当然考えられる海外との交流、海外留学生の受け入れ等に対する配慮として英語併記のサインが要求される。ニュアンス、あるいは通念の違いによる英訳の難点はあるとしても、日本語に対し英語の併記を原則とすることが必要不可欠な問題である。

●サインの種類とその標示内容

今回のサイン計画はキャンパス内のサインのみに限定することにし、サインの種類、及び数については前記コンセプトに基づきは最小限にしぼって計画を進めた。

サインの種類と、その標示内容は次の通りである。() 内、標示内容

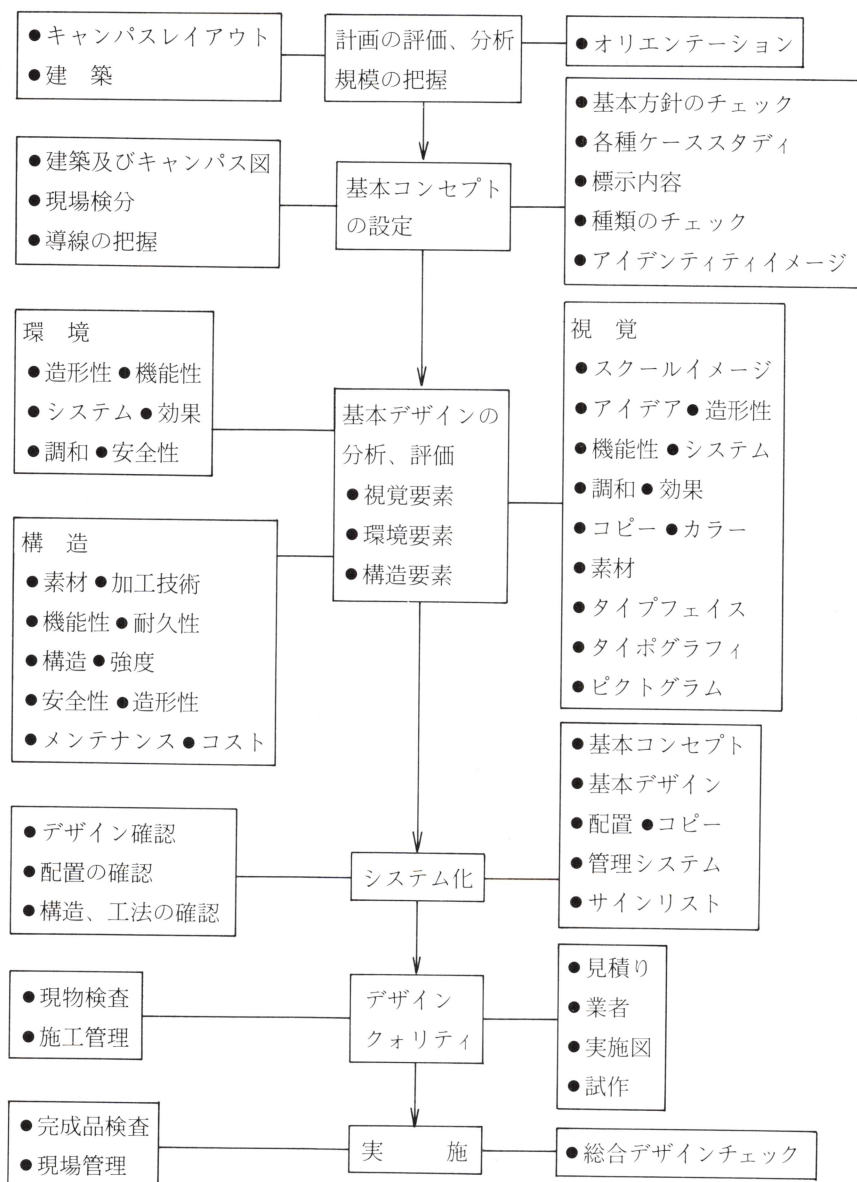
1. 屋内ドアサイン 各施設入口でその施設を標示するサイン
(部屋番号、施設名又はピクトグラム)
2. 屋内カウンターサイン 各施設カウンターでその部署、業務を標示するサイン
(部署、業務名)
3. 屋内総合サイン 屋内で各階毎の施設をまとめて標示するサイン
(階数、施設名)
4. 棟標示サイン 棟入口で棟を標示するサイン
(棟名)
5. 屋外誘導サイン 屋外で各棟への誘導をするサイン
(矢印、棟名)
6. 屋外総合案内サイン キャンパス入口で総合的に案内するサイン
(キャンパス地図、棟名、施設名、コース名)

標示には必ず和、英両語を併記することを原則とし、便所、電話等の一般共同施設、設備については分かり易くピクトグラムによる標示方法とした。

●作品の展示

屋外総合案内サインの横に並べ、作品を取付け、展示をするスペースを設けた。当キャンパスは専門の造形教育の場であり、その eye catcherとしての効果も期待したいとの考え方である。一定周期で展示替えを行い、計画的に新鮮な作品展示をして行きたい。また、資料展示室の展観告知等にもこのスペースは使用可能である。

●当サイン計画のフローチャート



環境要素

加藤 松雄

大学のサイン標識は、一般公共の場でのそれとは、ややニュアンスを異にしている。その目的とされることがらが、不特定外来者を対象としてなされる、言わば、パブリックな側面と、学生・教職員等を対象としたプライベートな側面とを併せもっている。この事情において、標識のもつ性格を、どう位置づけるかが問題である。キャンパス内では、〈尋ねる——それに応える〉という対話の可能性が潜在し、それが、公共一般の場でのそれとは、また、違った微妙な特性を含んでいる。それは、このような場においては、特に優先されることがらかも知れない。したがって、学内での標示においては、積極性を第一とする一般公共の場での、それよりも、穏やかな印象、控え目な位置づけが自然である。

環境要素としては、まず、サインシステムと配置の問題がある。同時に、機能的観点から、環境との調和の問題がある。

サインシステムでの背景となる条件は、標示するものと、指示するものに大別されるが、前者は、目標とされるものであり、後者は、そのための誘導されるものである。システム内容は、さらにそれを区分し、その形態・寸法等を規定し、標記内容、標記形式、素材、処理、構造及び取付等が対象となる。

配置においては、動線に沿って行われるが、棟内、棟外のエリアの相違確認と、その各々の特性、有機性等の中で考えなければならない。特に誘導標示の場合は、指示する矢印の方向と対象物との関係が微妙なケースがあり、取付角度においても慎重さを要する。

環境との調和、あるいは、造形性での関連等は、相互の問題として重要である。建築が先行された状態でのサイン計画では、当然、その接点での有機性が必要である。サイン機能の直接の問題は、サイン板の所在および、指示内容の確認ということであるが、同時に、それは、ものと

して存在しており、イメージを与えている。内容標示—標示物体—環境への配置—建物・施設という関連性は、ものとしての属性において有機性を保持し、緊密にサイン機能が働く要素の一端を荷っている。サイン板は、ステンレスとボルトが素材であり、矩体としてのコンクリート、石材板等とコントラストをなしている。特に、屋外サインの場合は、石材板を建植し、サイン板との一体化したイメージは、造形性が強調され、周囲環境との関係が形成されていく。

環境要素としての具体的な計画は、つぎの5項である。1、動線 2、サインシステムと配置 3、標示内容 4、メソッド 5、取付位置。

動線／この計画において、範囲の対象とされたのは、キャンパス進入における駐車場から通路を経て、所要施設へ至る間である。それは、屋外総合案内標示、屋外誘導標示、屋内各種標示を各々中心とした、3つのエリアに区分することができる。第1のエリアは、キャンパス導入の発端にあり、図書館・管理棟正面前庭を中心とした屋外スペースである。大学への進入は、主として、スクールバス、自動車であるが、動線は、バス停と駐車場の2方向から始まり、この地点へ集中する。第2のエリアは、ここから、地上階段を登り、各棟・各施設へ至る、分岐通路を中心としたスペースである。第3のエリアは、5つの棟内部のすべてのスペースである。

サインシステムと配置／動線に沿ったサインの種類は、つぎのものがある。屋外総合案内サイン、屋外誘導サイン、棟標示サイン、屋内総合サイン、屋内ドアサイン、屋内カウンターサイン。

第1のエリアにおいては、屋外総合案内サインと、図書館・管理棟の棟標示サインである。前者は、絵地図をもって、キャンパス全体を総括的に標示したサインである。サイン板の取付矩体として、石材板を建植するが、別途、空白部を設け、作品を取付けている。大学のイメージに通じることにおいて、サイン機能に準ずる、とする考え方である。後者は、玄関外壁に棟名を標示する。

第2のエリアにおいては、まず、屋外誘導サインがある。各棟への分岐誘導が必要であり、2地点に設ける。取付矩体は、石材板で建植設置。棟標示サインは、アトリエA棟、及び、B棟、講義棟、学生ホールであ

る。

第3のエリアにおいては、屋内総合サイン、ドアサイン及びカウンターサインである。屋内総合サインは、一階、正面玄関附近の壁面に取付ける。ドアサインは、各室の主要ドア附近に取付ける。カウンターサインは、図書館・管理棟内の所用受付に置く。

標示内容／標示要素は、文字、数字・矢印、ピクトグラム及び色彩等である。文字は、横読みに統一し、漢字、かな文字、英字を使用している。文字・記号の群とピクトグラムの群に大別できるが、前者は、屋外誘導サイン、棟標示サイン、屋内総合サイン、ドアサイン、カウンターサイン等であり、後者は、便所サイン及び、文字群との併用であるが、屋外総合案内サインである。

メソッド／つぎのものがある。・サイン板の形態及び寸法・標記文字・記号等のタイプフェイス・ピクトグラム・配色・印刷・素材取付矩体及び取付等。

サイン板の形態は、方形としている。モジュールにおいては、一辺の単位を25センチと規定し、その倍数によって、大きさの変化を与えている。各サイン板の寸法はつぎの通りである。

屋内ドアサイン……………	}	250mm×250mm
屋内カウンターサイン…		
棟標示サイン……………	}	500mm×500mm
屋外誘導サイン……………		
屋内総合サイン……………		1,000mm×500mm
屋外総合案内サイン……………		1,100mm×1,000mm

サイン板は、ステンレス材が使用され、タイポグラフィ、ピクトグラム等によってデザインされた表面は、シルクスクリーン印刷が施されている。

タイポグラフィ、ピクトグラム等は、〈視覚要素〉の項に、又、素材・取付矩体等は、〈素材・構造要素〉の項にその報告を譲る。

取付位置／6種のサインは、一定の規準を設けて、取付けの高さを決定しなければならない。特に、板面全体の確認と同時に関係しながら読む行為が行われる。その確認の発端として重要である。取付位置に関し

て、他にもうひとつの問題がある。屋外サインの場合、石材板を建植し、それを取付矩体としていることである。サイン板は、矩体と一体化し、形態全体としての積極性をもっている。したがって、サイン板は、この状態においてのみ、取付位置をやや低くし、全体バランスを考慮している。

屋内総合サインの場合、取付位置は、つぎのような規準をもって決定している。確認者の身長を1.7メートルとする。その場合、視点の高さは、およそ1.54メートルである。サイン板の天地は、1メートルである。板の中心に視点を置くと、床から、板の上端までは、2.04メートルとなる。

取付けられた6種類のサイン板、上端までの寸法は、つぎの通りである。

屋内ドアサイン	1,770mm
屋内総合サイン	2,040mm
棟標示サイン	2,040mm
屋外誘導サイン	750mm
屋外総合案内サイン	1,350mm

素材・構造要素

品川 誠

前述の基本コンセプトを受けて、サインに用いる素材と構造を検討してみる。

まず全体として、設置条件により材質や表示の多様性に対応しながら、しかも一貫したサイン・システムの原則が個々のサインの形や構造を通してうかがえ、また、サイン類が設置された後には、どこに行けば案内標識があり、建物のどの位置に案内板・表示板がとり付けられているというような、案内する人にも、される人にも判りやすいルールを持つシステムでありたい。具体的には、

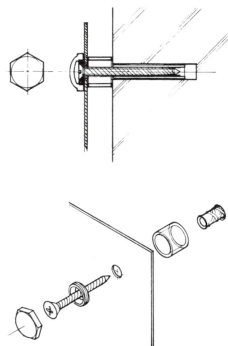
- 移転後、暫くの間は、構内の諸施設（棟・室）の用途・名称について頻繁な変更が予測されるので、サインもその変更に対応できるシステムを用意しておいた方が良い。従来、サインだけの耐久性やメンテナンス性を重視するあまり、サインの品質を高めて耐用性を増しても、表示すべき要件の方が変わるために役に立たなくなり、間に合わせの紙切れを貼付したりするケースはよく見受けられる。このような事態に対処するために、まず情報を伝達すべき表示部とその支持部とを構造上、また素材の面からも分離して考える。
- 表示部の材質はステンレス板・ヘアライン仕上とし、屋内で1mm厚、屋外では1.5mm厚を用いる。表示内容をシルクスクリーンプロセスで印刷し、屋外用では耐候性を増すために焼付処理を施す。
- 表示板の支持部は設置場所によって材質・構造が異なる。建築物ではR.C.壁、プレキャスト・コンクリート壁、石膏ボード壁等に取り付けられる。また屋外に独立して設置されるサイン系では歳月とともに落着いてくる構内の諸施設、植栽、樹木の中にあって、やはり風雪のエイジング(こなれ)に耐える材質でありたい。そのために屋外用の支持材としては旧来「みちしるべ」に見られる御影石材を用いた。(写真②)

- 屋内・屋外共に、表示板の支持部への取付けを共通の方式に統一する。これは支持部の耐久性に対して、表示部の耐久性、表示内容の有効性が一般に短いサイクルだと考え、それに対処して、表示板の取替え、組付けや、組付け用の部品の管理等を容易にするためである。(図A)

こうして、表示部分に可変性を持たせることと、取付方式を統一しておくシステムにより、サインとしては時とともに常に新しい表示内容を伝達しながら、屋内にあっては常に定まった位置と大きさのルールによって利用者を誘導し、また屋外にあってはなじみ深いランドマークとして、その足元に咲き乱れる草花とともにキャンパスの風景の中に融け込んでゆくのではないかと考えた。(写真⑥)



写真 a 「みちしるべ」



図A 表示板取付法



写真 b 屋外誘導サイン

視覚要素

高北 幸保

視覚要素として、デザインの規定は、(A)タイプフェイス（和文、英文、数字）、(B)ピクトグラム、(C)矢印、(D)レイアウト計画があるが、手として、主の要素となるタイプフェイスを決定し、そのイメージにあう矢印のデザイン、ピクトグラム、最後にレイアウトに入るという方法をとった。

A. タイプフェイス（和文）

サインの加工として、版下をつくりシルクスクリーンによる焼き付けが決定している。多くのサインを短期で取付けなければならない、大施設の性格として、毎年度始めに施設利用変更が行なわれるので、メンテナンスを早急に求められる、等の理由により、タイプフェイスを写真植字書体より選ぶこととした。

サインに使用するタイプフェイスの条件としては、まず視認度の高さがあげられる。視認度の高さは、(1)文字の太さが基本として一定である、(2)ふところが深い、(3)文字部の平均面積が50%に近い、ことにより得られるが、以上の条件を満たす写真植字書体を抽出（例1）。なお東京、福岡の地下鉄等で使用されて、視認度の非常に高いゴシック4550を写真植字書体ではないが上げておく。

◎ゴナDB（メーカー・写研）

（例1）よりゴナDBを決定した。理由は次のとおりである。

1. 視認度が高い（ふところが大きく、つぶれが少ない）
2. 文字のアクセサリーが少なく、環境の中で個性を主張しすぎない。
3. カナと漢字の変化がおとなしい。
4. 垂直、水平線を多用しているので、行としての連なりが美しい。
5. ベースに対して、文字の主張が強い（エッジが角である）。
6. 各々の字幅の差が安定しているので、組字によるスペーシングが容易である。

7. 想定される文定の大きさ（30～50m ミリ程度）において、文字の形成ラインがシャープである。
8. （例1）で示したようにゴナD、ゴナB、ゴナEなどのグループがあり、視覚イメージが同じであり、視認度の高さの違うタイプフェイスが得られることは、特別サイン（イベント用）に便利である。
10. 視認度そのものは、ゴナE、ゴナBの方が高いが、基本コンセプトである「目立ち過ぎない」「邪魔にならない」という点において、ゴナDBが望ましい。

A. タイプフェイス（英文・数字）

ゴナDBにおける英文・数字は（例2）であるが、すべての和文書体がそうである様に、ゴナDBにおいても枠面いっぱいにデザインされているので、英文・数字のもつ美しさをそこなっている。従って英文・数字においては、ゴナDBとイメージが合致する書体としてヘルベチカライト（例3）を採用した。

B. 矢印

誘導サインにタイプフェイスと併用される矢印は、タイプフェイスと調和し、なお方向を明確に示さなければならない。また視覚的に正方形内にデザインを起し、どの方向を向いても、サイン全体のイメージをあまり変化させないものとした。（例4）

C. ピクトグラム

ピクトグラムは、新しくデザインを起こし利用者に学習させることより、現在、使用度・完成度の最も高いアメリカ・グラフィック・アーツきょうかい、アメリカ運輸省の提案する「国際シンボル」（例5）を採用した。なお、このシンボルシステムにないもので必要なものは、このピクトグラムのデザインシステムに準じて起す。

D. レイアウト

1. 屋内ドアサイン（写真10～12頁）

室名と室番号の2要素があり、室名は和文・英文をセットし、安定性と注目性を持たせるために、中央やや下部に配し、室番号は、ボリュームが小さく、室名より、役割が低く、英文大文字と数字というシンプルさによる美しさが得られるので、サインそのものを引き締める効果も含

め、上部に大きく配した。

また文字組は、視覚的美しさ、可読性の高さよりツメ組みとした。この考えかたは、以下のサインにも共通する。

2. 屋内カウンターサイン (写真13頁)

室名をセンターに配し、文字のサイズは、屋内ドアサインに準ずる。

3. 屋内総合サイン (写真14頁)

階名数字を大きく配し、階数に注目させると共に全体を引き締める役割を持たせた。各室名を並列かつ、可読性を高くするために頭ぞろえとした。

4. 棟標示サイン (写真15頁)

視認度を高くするため、室内より文字を大きくし、イメージの共通性をはかるため屋内カウンターサインと同レイアウトとした。

5. 屋外誘導サイン (写真16頁上)

矢印の存在を強くし印象づけるため、棟名と別に配した。棟名は、並列かつ可読性を高めるため頭ぞろえとした。全体の視覚イメージを屋内総合サインに準じた。

6. 屋外総合サイン (写真16頁下)

1～5までのサインを暗示させるために、頭ぞろえ、和文・英文の比率を他のものと同じに、総合案内としての機能とイメージを高めるため、地図を大きく配した。

(例1)

写研

BG-A-KL

石井太ゴシック

写研

YEG-L

新聞特太ゴシック

写研

DNAG

ゴナD

写研

DBNAG

ゴナDB

写研

BNAG

ゴナB

写研

ENAG

ゴナE

写研

DNAR

ナールD

モリサワ

見出ゴシック体

MB31

モリサワ

見出ゴシック体

MB101

モリサワ

じゅんゴシック

No. 3

モリサワ

じゅんゴシック

No. 4

モリサワ

太ゴシック体

B31

便利な写植のガイ

便利な写植のガイ

愛のあるユニー

愛のあるユニー

愛のあるユニー

仲間がいと楽し

便利な写植のガイ

旅人の心をなくさめる津

旅人の心をなくさめる津

旅人の心をなくさめる津

旅人の心をなくさめる津

旅人の心をなくさめる津

モリサワ
太ゴシック体
B 1

モリサワ
ツデイM

モリサワ
ツデイB

モリサワ
じゅん3 4

モリサワ
じゅんNo. 4

リョービ
ゴシックD

リョービ
ゴシックB

リョービ
ゴシックE

リョービ
モトヤゴシック体
G 8

リョービ
シリウスーB

旅人の心をなぐさめる津
旅人の心をなぐさめる津
旅人の心をなぐさめる津
旅人の心をなぐさめる津
旅人の心をなぐさめる津
写植の印刷デザイ
写植の印刷デザイ
写植の印刷デザイ
写植の印刷デザイ
写植の印刷デザイ

◎参考
ゴシック4550

回灰会 セソ
戒快改 タチツ

(例 2)

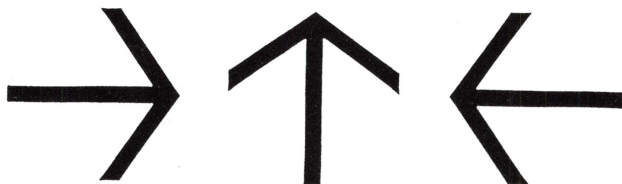
1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
 Visual Design
 Laboratory

(例 3)

ヘルベチカ・
タイ

ABCDEFGHIH abcdefghijkl
 IJKLMNOP mnopqrstuv
 QRSTUVW xyz 1234
 XYZ &?!β£\$ 567890(,)≡≡≡
 ≡≡≡

(例 4)



(例 5)

